様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６７２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１１６３

研究課題名（和文）高度情報化社会に必要な国語力としての視覚的リテラシー育成・実践プラン集の開発

研究課題名（英文）Development of Literacy Education Plans for Training Visual Literacy that are Required in the Advanced Information Sociaty

研究代表者
奥泉　香（Okuizumi, Kaori）

日本体育大学・その他部局等・教授

研究者番号：７０４０９８２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　今日の学習者は、文字のみで書かれたテクストを越え、絵や写真、図といった視覚的テクストから意味を構築する必要に日々接している。そこで本研究では、こういった状況の中で必要とされる視覚的リテラシーを、義務教育期間に母語教育において育成するために有効な教材や発問、また学習の枠組みについて整理・開発・提示した。
　また紙媒体と画面上での意味構築の違いについて、その研究の第一人者であるレン・アンズワース氏や、国立近代美術館の一條彰子氏を招聘して国際シンポジウムを開催し、異なる媒体における視覚的テクストからの意味構築の違いについて、議論を行って成果を公開した。

研究成果の概要（英文）：In an advanced information society, texts that learners read and write are structured not only by characters but also by images. Therefore this research has focused on a meaning making process from image texts and multimodal texts.
 In conventional researches, most of the examples they presented are Western texts, however different languages have different cultures and visual design grammars. This means visual languages are not transparent and universally understood, but culturally specific. Therefore this research examined Western visual languages and made them reorder for Japanese teachers and students. In addition we held an International Symposium on Multimodal Literacy Education, and discussed on useful methods for teaching them.

研究分野：教科教育（国語科）

キーワード：ヴィジュアル・リテラシー　視覚的テクスト　静止画　発問　教材　母語学習

１．研究開始当初の背景

高度情報化社会と称された研究開始当初、学習者を取り巻くテクスト環境は変化を遂げていた。その中でも、学習者が文字のみによって構成されるテクストだけではなく、絵や写真、図といった視覚的なテクストからも、意味を構築できるようにする学習は、益々重要になってきていた。

また、こういった分野における主な先行研究は、英語圏のものが多く、分析例として提示されているテクストも英語圏のものが主となっていた。しかし、視覚言語や視覚の文法と言われるものの中には、文化や地域性を反映したものも多く、また特に言語を介して意味構築する場合には、言語の特異性を考慮する必要のあるものも多い。

したがって、日本の学習者が学びやすいような、視覚の文法やそれらの活用を含んだ視覚的リテラシーの学習内容を、再整理して提示する研究が必要とされていた。

２．研究の目的

上述のような背景を受けて、本研究では日本の義務教育期間における学習者が学びやすいような教材や、視覚の文法における枠組みの再整理を行うことを研究の目的に据えた。また、これらの枠組みの活用を含んだ視覚的リテラシーの学習内容を、国語科の授業で用いることができるよう、この種の学習に有効な教材や発問の開発・整理を目的として設定した。

３．研究の方法

上記の目的のため、以下のような方法を以下のようなスケジュールで計画し、実行した。

（１）本研究の関連文献を、英語圏の先行研究を中心に収集した。またそれらの文献を購読しながら、日本の国語科学習で活用できそうな観点や枠組みを拾い出し整理した。

（２）上記の整理の中から、英語と日本語とで、あるいは欧米と日本とで異なる文化的背景を反映していると考えられる観点を抽出し、それらを日本の学習者が使いやすいように修正・整理した。

（３）（２）で整理した観点や枠組みを、日本の学習者が学習しやすい教材テクストを選定・整理した。

（４）（３）で選定した教材テクストに合わせて、（２）の観点や枠組みを学習できるような発問や指示を開発した。

（５）（４）で開発した発問や指示を、実際の小学生、中学生に使用してもらい、分かりづらい点や、理解しにくい発問・指示を修正した。

（６）（１）～（５）を整理して、全国大学国語教育学会で発表し、参加者から批評を仰いで、それを基に発問や指示、選定教材を修正した。

（７）（６）の成果を、国語教育史学会誌に論文投稿した（採択、印刷中）。

４．研究成果

本研究の成果は、３でも述べたように、全国大学国語教育学会での発表や論文投稿、国語教育史学会誌への論文投稿という形でも、その知見を公開したが、本研究の最終年度には、国際シンポジウムを開催して、幼稚園教諭や保育士、小学校や中学校教諭、あるいは高等教育機関の教員、一般市民と広く広報を行い、研究の成果を公開した。

研究成果の要点は、以下の通りである。

（１）英語圏の先行研究で言及されている視覚的リテラシーの観点や枠組みの内、日本と異なる観点を数点見出すことができた。例えば、テクスト内における時間の推移を表象する枠組みや、空間的な上下の意味に関する表象等である。これらは、舞台芸術の歴史やキリスト教を背景として構築されてきたため、それらの意味が色濃く反映されていることもわかった。

（２）視覚的テクストに表象されている人物や動物の属性を検討するために、本研究では選択体系機能理論を援用したが、そのことによって、属性を３種類の観点から整理して構築できることがわかった。

またこのことによって、個人的な性格や人物像だけでなく、社会的属性や社会的に属するグループについても、造形していく学習の道を開くことができた。

（３）この種の学習には、絵本や広告から多くの有効な教材を選定することができることがわかった。理由は、絵や写真、図の配置や、それらと言葉との組み合わせ方が、試験的な新たな配置や組み合わせ方が多いからであると考えられる。こういった教材を積極的に活用することによって、既習の知識を活用し、それら新たな配置や組み合わせの意味を読み解く学習法も開発への道が開けた。

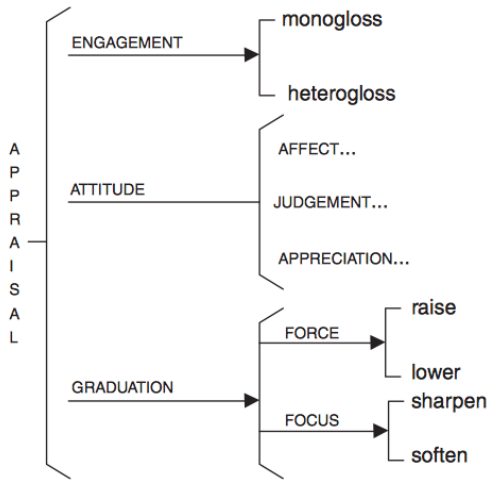
（４）本研究の成果を国語科の学習といった観点から整理してみた時、視覚の文法や視覚的比喩、さらには間テクスト性といった枠組みにおいて、言語の文法や言葉から成るテクストとの類似性、あるいは学習の接続性を見出すことができた。間テクスト性とは、テクストと他のテクストとのつながりから意味を構築する枠組みである。言葉から成るテクストにおける端的な例としては、引用を挙げることができる。

（5）視覚的なテクストから意味を構築する際には、描かれている対象からだけでなく、その対象の向きや、対象に付随する手足や部品の傾きや方向からも、意味を構築し言語化できることがわかった。

（6）視覚的なテクストから意味を構築する際には、描かれている対象からだけでなく、その対象と他の対象との距離や、向きからも意味を構築することができることがわかった。

（7）視覚的なテクストから意味を構築する際には、描かれている対象からだけでなく、その対象と読み手との位置関係や、双方の視線の関係によっても、異なる意味が構築できることがわかった。

（8）視覚的なテクストから意味を構築する際には、描かれている対象からだけでなく、その対象が選択される過程を考察できる、システムネットワークと呼ばれる、下図のような選択体系機能理論における作図法が、有効であることがわかった。



(Martin and White, 2005, p. 38)

上図の作図によって、選択されなかったテクストの要素や、テクストと読み手との関係の意味構築が可能となることがわかった。

（9）今後の課題としては、本研究で得た知見や、それに基づいた発問や指示、あるいは教材を、学年や他教科との学習状況を考慮して配列や組み合わせるための枠組みを整理したい。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① 奥泉香「視覚化する書記テクストの学習―批判的談話分析とデザイン概念を援用して―」『国語科教育』第 72 集，2012,9 全国大学国語教育学会,pp.25-32【査読有】

② 奥泉香「メディア教育、リテラシ―における実践研究の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』全国大学国語教育学会，2013,5,pp401-408　【査読有】

③ Kaori Okuizumi, Noriko Okamoto, The creation of new values in Japanese texts through the use of multimodal communication, *Exploring Visual Literacy Inside, Outside and through the Frame.* Inter-Disciplinary,Press Oxford, United Kingdom, 2013,4 pp.59-66【査読有】

④ 山元隆春「米国における理解方略指導の具体的展開 ： Hervey & Goudvis 編『解釈の道具箱』における『意味を推論する』授業の場合」『論叢国語教育学』復刊 4 巻，2013,4,pp.47-63【無査読】

⑤ 奥泉香「バイモーダル・テクストとしての絵本研究の変遷 ： 絵と言葉との関係を分析するメタ的枠組み」『国語教育史研究』第 14 号，2014,3，pp.41-48【査読有】

⑥ 奥泉香「絵本を活用したリテラシー実践へのマルチリテラシーズの影響 ： オーストラリア連邦 Nsw 州及び Qld 州の調査を例に」『学習院女子大学紀要』 第 16 号，2014,3 pp.23-28【無査読】

〔学会発表〕（計 3 件）

① Kaori Okuizumi, Noriko Okamoto, The creation of new values in Japanese texts through the use of multimodal communication, International conference on Visual Literacy(Oxford University), 2013,4

② 山元隆春「絵本を用いた理解方略指導の実際 ： 米国の事例を中心として」第 124 回全国大学国語教育学会,弘前大会弘前大学教育学部, 2013,5

③奥泉香・山元隆春「国語科学習において絵本を活用するための発問開発」第 125 回全国大学国語教育学会,広島大学教育学部, 2013,10

〔図書〕（計　6 件）

① 奥泉香「絵本を使って異文化コミュニケーションを考える授業」『言語教育における異文化コミュニケーション能力再考』ココ出版，2013,12,pp.99-122

③ 佐藤慎司,奥泉香,仲潔,熊谷由「文化：文化人類学とことばの教育における文化概

念の変遷と現状」『言語教育における異文化コミュニケーション能力再考』ココ出版，2013,12,pp.3-31

④ 熊谷由理、奥泉香、仲潔、丸山真純「コミュニケーション：コミュニケーション研究とことばの教育におけるコミュニケーション概念の変遷と現状」『言語教育における異文化コミュニケーション能力再考』ココ出版，2013,12,pp.33-69

⑤ ジェニ・ポラック・デイほか（山元隆春訳）『本を読んで語り合うリテラチャー・サークル実践入門』溪水社，2013,10,pp.1-191

⑥ 山元隆春『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社，2014,2,pp.1-335

⑦ 奥泉香　編著『ことばの授業づくりハンドブック　―メディア・リテラシ―の教育』溪水社，2015,5,pp.5-18

６．研究組織

(1)研究代表者

奥泉　香（Okuizumi Kaori）
日本体育大学　児童スポーツ教育学部
教授
研究者番号：70409829

(2)研究分担者

北川　達夫（Kitagawa Tatsuo）
日本教育大学院大学 教授
研究者番号： 70537399

(2)研究分担者

山元　隆春（Yamamoto Takaharu）
広島大学　教育学部　教授
研究者番号：90210533